

爪先で砂利道を踏みしめると、ざくりという音が妙に大きく響いた。宿の看板はなく、石畳の小径の先にぽつりと灯る行灯が一つだけある。その仄かな灯りを頼りに歩を進めると、やがて黒い板塀と古びた茅葺き屋根の玄関が姿を現した。

玄関先には、湯気の立つ手水鉢と季節外れの山吹の花が一輪、活けてある。千尋は一瞬ためらいそれから意を決して格子戸に手をかけた。すると、その扉は彼女の手を待っていたかのように、静かに内側へと滑ったのである。

「お待ちしておりました。佐伯様でいらっしゃいますね」

上がり框の奥薄暗い土間の中央に、若い男が立っていた。紺色の作務衣に濃いグレーの前掛けをした、宿の若旦那だろうか。彼は千尋の顔を一瞥すると、微かに目を細めた。その視線には値踏みするような、それでいてどこか憂いを帯びた複雑な色が混じっていた。千尋は咄嗟に視線を逸らし、丁寧に頭を下げた。

「はい、佐伯です。本日はお世話になります」

男は軽く会釈を返し、千尋のトートバッグを無言で受け取った。その手は大きく、節くれ立っているのに、不思議と柔らかかった。

男の名は桐生隼人というらしい。宿の帳場に置かれた宿帳で、彼女はその名前を確認した。筆圧の強い几帳面な字だった。

「お部屋へご案内いたします。どうぞ、こちらへ」

隼人はそう言うと千尋に背を向けて廊下を歩き出した。その背中
は広く、けれどどこか寂しげで千尋はその背中を追いながら、この
宿が持つ独特の空気に次第に呑み込まれていくような感覚を覚えて
いた。

廊下の床板は歩くたびにきしみ、それが妙に心地よいリズムを刻
む。障子越しに漏れる光は、すでに夕闇の藍色に染まりつつあった。

案内された部屋は、八畳ほどの和室で窓の外には小さな滝が流れ
ていた。水音が絶え間なく響き、それは都会の喧騒とは正反対のけ
れどどこか圧迫感のある静寂だった。

隼人は部屋の中央に座ると、千尋にも座るように促した。彼女が
座布団に正座すると、隼人はお茶を淹れながらぽつりぽつりと宿の
説明を始めた。湯は源泉かけ流しであること、夕食は部屋食である
ことそして、この宿にはいくつかの「言い伝え」があること。千尋
は黙って頷きながら、彼の言葉の端々に漂う何か秘密めいたものを
感じ取っていた。

お茶を一口含むと、山のミネラルを含んだような、少し苦味のあ

る味が口の中に広がった。隼人は千尋のそんな様子を、じっと観察するように見つめていた。その視線が、彼女の肌の上を這うように感じられ千尋は無意識に膝の上で手を握りしめた。

「何か、お困りのことはありませんか」

隼人の突然の問いに、千尋は顔を上げた。彼の目は深い琥珀色をしていた。その瞳の中に、千尋は自分の姿が小さく映り込んでいるのを見た。

彼女は首を横に振った。何も困っていない、と答えるつもりだった。けれど言葉は喉の奥で詰まり、代わりに小さなため息が漏れた。

隼人はそれ以上何も聞かず、静かに立ち上がった。

「夕食は七時にお持ちします。それまで、どうぞごゆっくり」

そう言い残すと彼は音もなく部屋を出て行った。障子が閉まる瞬間、彼の匂いがふわりと千尋の鼻腔をくすぐった。線香のような、それでいてもっと生々しい男の体臭。

千尋は一人きりになった部屋で、しばらくその場を動けずにいた。窓の外では、滝の水音がますます激しさを増し宵闇が山全体を包み込もうとしていた。

彼女はトートバッグから一枚の写真を取り出した。そこには、笑

顔の自分と、もう一人の男性が写っている。千尋はその写真をじっと見つめ、それからゆっくりと、胸の奥に押し込むようにしまい込んだ。写真の端は、何度も何度も触れたせいで少しだけ擦り切れていた。

夕食は、予告通り七時に運ばれてきた。隼人が一人で、膳を部屋まで運んでくる。

品数は多くはないが、どれも丁寧に作られた山の幸ばかりだった。岩魚の塩焼き、山菜の天ぷらごみのおひたし、そして、きのこたっぷりの炊き込みご飯。

千尋は一人で箸を進めながら、ふと、隼人が膳を置くときに見せた指先を思い出していた。彼の指は、爪の形まできれいに整えられていてけれど親指の付け根には、古い火傷の痕のようなものがあつた。千尋はその痕が気になりながらも、聞くに聞けずただ黙々と食事を口に運んだ。

味は、驚くほど美味しかった。特に岩魚の塩焼きは、皮がパリッと香ばしく身はふつくと柔らかかった。

千尋は久しぶりに、食事を「美味しい」と感じた。

東京にいた頃は、何を食べても味がしなかった。コンビニのおにぎりも、高級レストランのフルコースもすべてが砂を噛むようだった。

けれど、この山奥の宿で食べる粗末な夕食はなぜか彼女の心の空洞を、少しずつ満たしていくようだった。

食事が終わる頃、廊下から足音が近づいてきた。隼人が膳を下げて来たのだ。

彼は部屋に入ると、千尋の食べ終わった膳を見て微かに微笑んだ。

「お口に合いましたか」

千尋は素直に頷いた。

「とても、美味しかったです」

その言葉に、隼人は少し驚いたような顔をした。それから、彼は膳を片付けながら、ぽつりと言った。

「この宿は、昔から傷ついた人たちが訪れる場所なんです」

千尋は箸を置いた手を、膝の上で止めた。隼人は続ける。

「逃げてきた人、失くした人あるいは、何かを探している人。皆さんそれぞれの理由を抱えて、この山を登ってくる」

彼は膳を盆に載せ立ち上がった。そして、部屋の入りで一度振り返り千尋の目を真っ直ぐに見つめた。

「佐伯様も、そうでしょう」

千尋は何も答えられなかった。ただ、彼の琥珀色の瞳の中に、自分と同じような孤独を見た気がした。隼人はそれ以上何も言わず、静かに部屋を出て行った。襖が閉まる音がやけに大きく響いた。

千尋は一人、食後の茶を啜りながら彼の言葉を反芻していた。傷ついた人たちが訪れる場所。ならば、自分は何に傷つき何から逃げてきたのか。

彼女は、あの写真のことを思い出していた。写っている男性の名前は、確か、悠斗といった。大学時代の友人で、そして、かつては恋人同士だった。

けれどその関係は、千尋が彼の友人と一夜を共にしてしまったことで、あっけなく終わった。あの夜のことを思い出すと、今でも胸が締め付けられる。

酒の勢いだった。後悔しかない。

けれど、悠斗は千尋を許さなかった。当然だ。千尋は自分を責め続けた。そして、東京のすべてから逃げるように、この宿へとやって来たのだ。

千尋は茶碗を置き、立ち上がった。窓の外はもう完全な闇に包ま

れていた。滝の音だけが、規則正しく響いている。彼女は浴衣に着替えると、備え付けの温泉へと向かった。

廊下はひんやりと冷たく、裸足の足裏に古い木の感触が伝わってくる。

途中、帳場の前を通りかかったとき千尋はふと足を止めた。

帳場の奥の部屋から、微かに光が漏れていた。そして隼人の低い声が聞こえてきた。誰かと電話をしているようだった。

「……ええ、彼女が来ました。……はい、間違いありません。……わかりました。今夜、話をします」

千尋は慌ててその場を離れた。心臓が、激しく鼓動している。彼女が来たというのは、自分のことだろうか。今夜話をする、というのは。

千尋は混乱しながら温泉へと続く階段を下りていった。湯気が立ち込める脱衣所で、彼女は浴衣を脱ぎ、タオルだけを持って湯船へと向かった。誰もいない露天風呂は、貸切状態だった。千尋はゆっくりと湯に浸かり、深いため息をついた。湯は熱すぎずぬるすぎず、ちょうどよい温度だった。山のミネラルをたっぷり含んだ湯は、肌にまとわりつくように柔らかくそして、どこかほのかに硫黄の香りがした。

千尋は目を閉じ、湯の感触に身を委ねた。